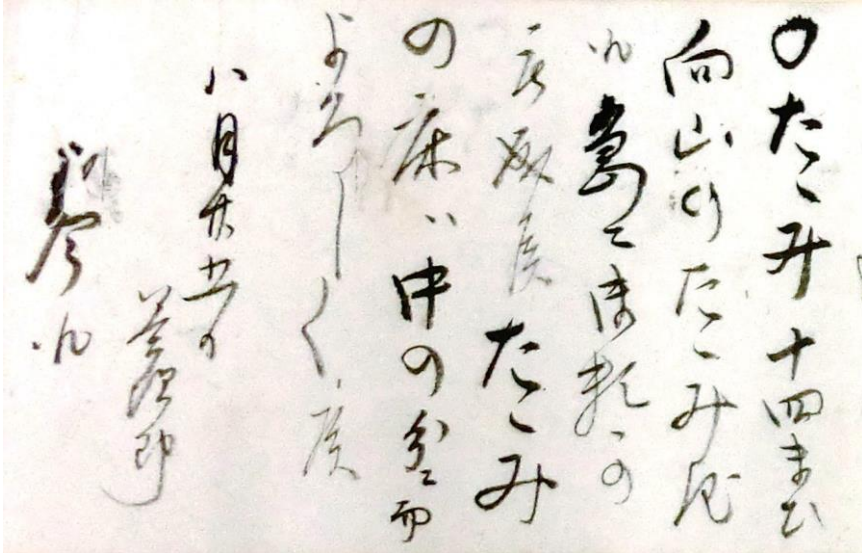


明治初年 大村益次郎の手紙



▽当館所蔵「大村益次郎文書」は、大村家に伝来した大村益次郎に関する文書群です。この中には、幕末から明治初年にかけて、木戸孝允をはじめとするさまざまな人びとから大村に宛てられた多数の書状とともに、大村が父に宛てた書状9点、妻琴に宛てた書状4点が残されています。

▽後年大村は、その功績から、「近代軍制の創始者」「軍神」とも称された人物です。また司馬遼太郎『花神』では、天才的な軍才をもった合理主義者、ただし無愛想で少し気難しい人物として描かれています。

▽当館に残る父や妻宛ての書状からは、等身大の大村を垣間見ることができます。今月はその中から、明治2年(1868)8月25日に妻琴へ、同年10月18日に父へ宛てた大村の書状を紹介します。大村が滞在先の京都で兇徒に襲われ(9月4日)、その傷が元で命を落とす(11月5日)直前の手紙です。儉約家としての大村、父親思いの大村の姿をそこに見ることができます。

▽なお、平成29年度、これらを含む大村益次郎関係の文書106点を、当館古文書実践講座の受講生(第1班)が解読しました。

代筆御免

一翰呈上仕候、寒氣

之節ニ御座候処、先以

御機嫌能被遊御座、

忝と大悦至極ニ奉存候、

次ニ私事、過日琴上坂

仕候様申遣し候節、

容体委敷申上候通

頃日ニ至候而ハ順快ト

奉存候、食事モ余

程進勝ニ相成候間、

早最御氣遣御無

用ニ奉存候、只々手間

とり候ハ膝之疵而已

ニ御座候へとも、是も

かつ〜年末

までにハ全快可仕と

ホードイン申事ニ

御左候、朝暮指ヲ屈

し、夫而已相楽居

申候、是又御安心可被下候

ふらねる肌着一

枚差送り候間、御

着用追々之寒

氣御被遊候度

奉折候、先ハ御見舞

旁如此ニ御座候、

明治二年 恐惶謹言

十月十八日 大村益次郎

尚々追而寒氣

御いと心專一ニ奉折候

(大村益次郎)

藤村尊大人

1 手紙の大まかな意味

代筆にて失礼します。

手紙をお送りします。寒い季節ですが、お父上には
ご機嫌良くお過ごしのことと喜ばしく存じます。

私ですが、先日、琴を大坂（療養中の大村の元）に遣
わすよう頼んだ時に容体を詳しく申し上げましたよ
うに、このごろはいたって順調です。食事もよく進
みますので、どうぞお氣遣いは無用にしてください。

回復に時間がかかっているのは膝の傷ですが、これ
もなんとか年末までには全快するだろうと医師ボー
ドインも申しています。朝晩、指折り数えて快復す
る目を楽しみに待つだけです。これについても心安
心ください。フランネル（毛織物）の肌着を一枚送
りますので、着用してこれからの寒さをしのいでい
ただければと思います。まずは御見舞までにて。

十月十八日

大村益次郎

なお、これからの寒さに気を付けてください。

藤村尊大人（父上様）

2 解説

明治二年（一八六九）七月、大村益次郎は、新政
府の兵部大輔（兵部省の実質的トップ）に任命されま
す。さっそく大村は軍制改革に着手しますが、その
方針には反対勢力も少なくありませんでした。九月
四日、大村は滞在先の京都で兇徒に襲われます。奇
跡的に一命を取り留め、一時は回復すると思われた
ものの、病状は次第に悪化し、医師ボードウインの
治療の甲斐なく、十一月五日死去しました。享年四
五歳。

この手紙は、死の半月ほど前、明治二年十月十八
日に国元の父親（藤村孝益、在秋穂、明治三年（一八
七〇）死去）へ送ったものです（ただし代筆）。自分
の病状は心配いらないと述べ（実際には、二十七日、
右大腿部の切断手術を受けます）、むしろ父の身を案
じ、寒さをしのぐフランネル（毛織物）の肌着を贈
っています。病床にあっても老父を思う、父親思い
の大村を偲ばせる内容です。

其御地皆様御無事之由也、珍重ニそんな候

此方も七月廿七日東京発足、木曽路通り無事二八月十三日京着致し候、御用有之、廿日二下坂、尚又御用相すみ次第一先

上京、九月十五日頃出帆ニ而帰り可申候

○此度桜井慎平帰郷相成候間、帰郷之上ハ見まひ悦ひとしてさかななりとも早々御送り可被成候、

○たゞみ十四まひ向山のたゞみ屋江急々御頼可被成候、**たゞみの床ハ中の分ニ而よろしく候**

明治元年
八月廿五日

琴江

益次郎

1 手紙の大まかな内容

故郷のみなさんいずれも「無事と」のことであれしく思います。

私も七月二十七日に東京を発ち、木曽路を通って無事八月十三日に京都に着きました。御用のため二十日大阪に行き、用が済み次第いったん京都に帰り、九月十五日には船でこちらを發つて帰郷する予定です。

○このたび桜井慎平が帰郷することなので、彼が帰ったら、帰郷祝いとして肴など贈っておいてください。

○家の畳十四枚ほど向山の畳屋に急ぎ頼んでおいてください。畳の床は中ぐらいのもので十分ですよ。

明治元年
八月二十五日

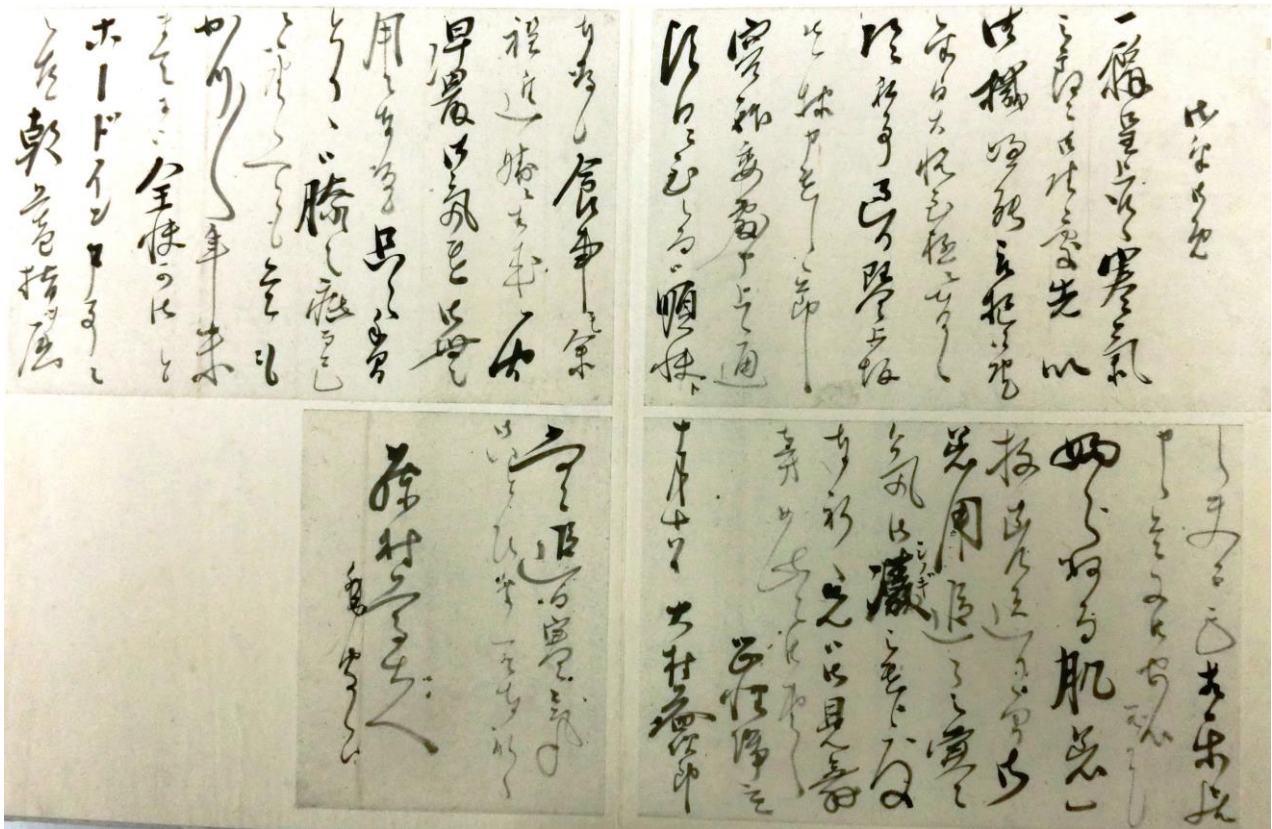
益次郎

琴へ

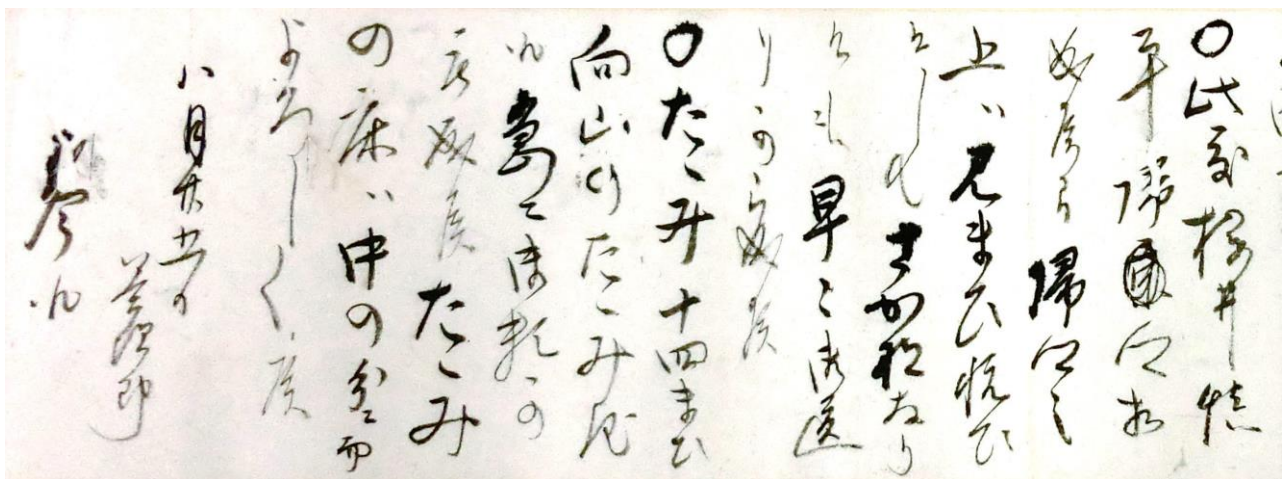
2 解説

大村が京都で襲撃される十日ほど前、国元の妻琴に宛てた手紙です。七月二十七日に東京を發つたのち、八月十二日に京都に着き、二十日には大阪に向い、大阪での用が済み次第いったん京都に帰り、九月十五日に船で帰郷する予定と伝えていきます。

帰郷にあたり、琴に家の畳替えを命じていますが、大村は、畳は中ぐらいの（品質の）ものでよいと注意しています。新政府の高い身分（兵部省の実質的トップ）になっても、大村が儉約家としての一面を失っていないことが知られる内容です。



明治2年10月18日 大村益次郎書状(父宛て) *大村益次郎文書37



明治2年8月25日 大村益次郎書状(妻琴宛て) *後半部分/大村益次郎文書41